

所蔵資料展示

教科書にのる有名古典



2.大和物語



7.平家物語

H29.6.8(木)~8.10(木)

三重大学附属図書館

— ごあいさつ —

三重大学附属図書館は館蔵貴重資料のうち日本の古典文学に関するものを 14 点選び、所蔵資料展示「教科書にのる有名古典」として公開することにいたしました。

題名のとおり、単なる古典文学の紹介ではありません。教科書にそれぞれ実際に収録されている作品です。まだ中学校高等学校などで学んだ日々が遠くない学生諸君は馴染み深いでしょう。大人の方々はかなりお忘れかもしれませんが、それでも平家物語、土佐日記、徒然草などは読んでみれば遠い昔を思い出すのではないのでしょうか。

興味深いのは、今回の展示資料の多くが単なる古典の本文ではなくて、言葉の意味や歴史的な事実を解説した注釈書であることです。注釈書は江戸時代に作られたものばかりです。これが何を意味するのかといいますと、江戸時代にはすでに古典文学は原文では簡単に理解できないものになっていたということです。また古典文学が原文から一足飛びに現代に伝えられてきたのではなく、こうした注釈書を経由して伝えられてきたとのこと。

古典文学研究や古典注釈書では、今回の展示に使う典籍の本文そのままを使うことはほとんどなくなったと聞きました。より著者の自筆に近いと思われる本が近代以降に発見されて、それを底本にして研究しているそうです。しかしながら、江戸時代の本文や注釈が現在の研究の基礎になっているのも間違いなさそうです。

小・中学校学習指導要領が本年度末に改訂されて「古典など我が国の言語文化（小中：国語）の充実」が入ってきます。伝統や文化に関する教育の充実という流れに沿った展示といえるでしょう。とはいえ堅苦しいことは抜きにして、教科書に掲載された古典作品を読んでみると味わい深く感じますがいかがでしょうか。

今回の展示は三重大学附属図書館の和本整理事業の一環です。蔵書印に適園文庫とある書籍は三重大学教育学部の前身である三重県師範学校教諭であった阿保友一郎先生の旧蔵書です。阿保先生が三重大学に残してくれた財産だといえるでしょう。三重大学附属図書館は過去の遺産を大事にし、また未来につなげたいと思っています。

平成 29 年 6 月 三重大学附属図書館館長 加納 哲

【展示凡例】

書名、読み（ひらがな）、ジャンル、刊・写、書型（サイズ）、巻冊数、編著者名、序跋者、刊行・成立年、版元（出版地）、旧所蔵元、架蔵番号、項目担当者名の順で記述。

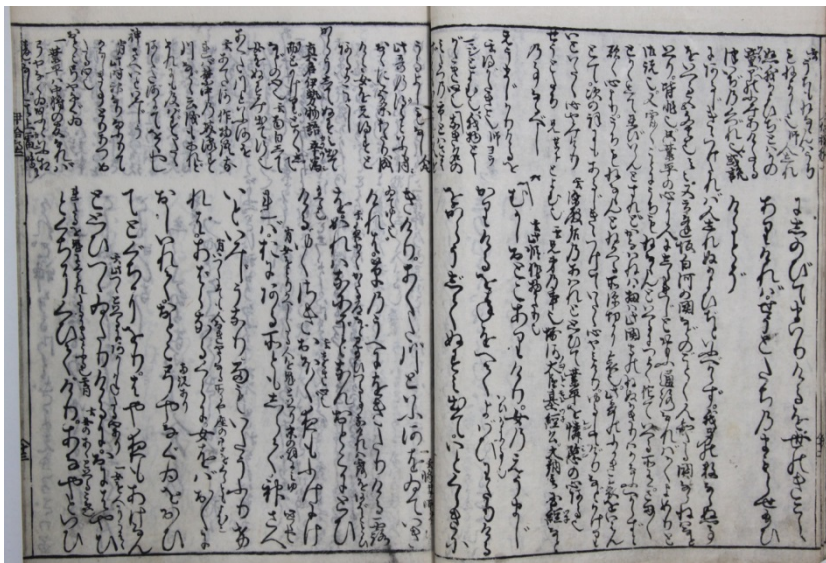
物語

「～物語」とは現代の小説にもよくある題名ですが、もともとは文学形態の一つです。ある人は見聞や想像をもとに、人や出来事を他の人に語る(ものがたる)形式で書かれた文学作品をいいます。日本ではこの形態はたいへん発達しました。日本文学史では狭義で1伊勢物語、2大和物語のような歌物語、3・4の源氏物語のような作り物語を指し、広義で5栄花物語、6大鏡のような歴史物語、7平家物語のような軍記物語なども指します。

1.伊勢物語拾穂抄 いせものがたりしゅうすいしやう

刊、大本、縦27.0×横19.1 糎、2巻2冊、北村季吟著、寛文1年成(1661)、延宝8年刊(1680)、長尾平兵衛版、適園文庫旧蔵、913.32./Ki 68。

江戸前期の国学者、北村季吟による『伊勢物語』の注釈書。本文から語句を抽出し頭注や傍注を施す。同じく季吟注の3『源氏物語湖月抄』とともに、注釈の新しい形式を確立した。『伊勢物語』は平安前期に成立した歌物語であり、主人公は在原業平とされている。業平の歌を中心にした125段の短編からなり、「昔男」から始まる簡潔な文章が特徴。展示箇所は、業平と若き日の二条後の逃避行を描く第6段「芥川」。作中の「白玉か何ぞと人の問ひしとき露と答へて消えなましものを」という歌がよく知られており、『伊勢物語』の中でも教科書へ採用されることの多い章段である。(出口真由)



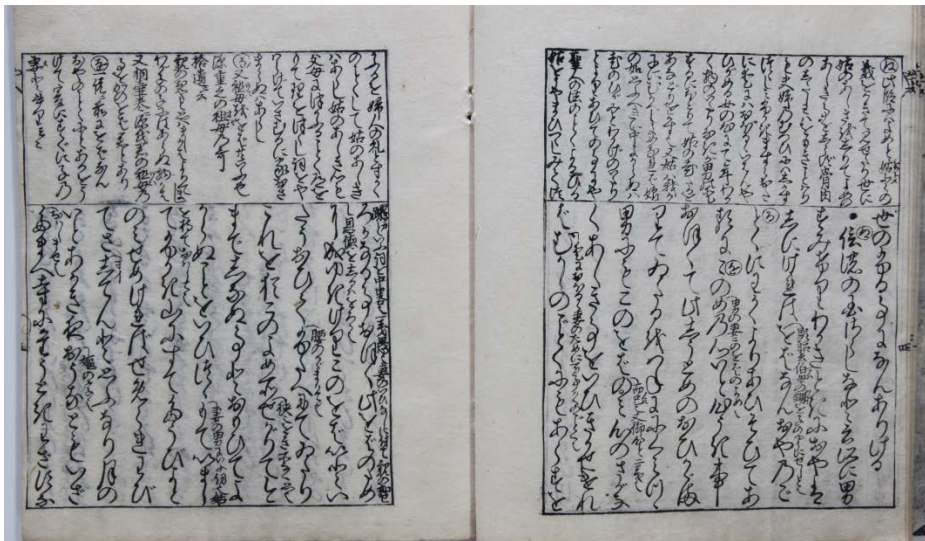
「芥川」

昔、男ありけり。女のえ得(う)まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうて盗み出(い)でて、いと暗きに来けり。芥川といふ河を率(る)て行きければ、草のうへに置きたりける露を、「かれは何ぞ」となむ男に問ひける。行く光多く、夜も更けにければ、鬼ある所ともらで、神さへいといみ(う)鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓・胡籬(やなぐひ)を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつるたりけるに(三省堂『精選国語総合』)

2、大和物語 やまものごたり

刊、半紙本、縦 22.8×横 16 糎、2 巻 5 冊、和田以悦著、明暦 3 年成(1657)、
谷岡七左衛門板、適園文庫旧蔵、913.33/Y45。

江戸前期の歌人和田以悦による『大和物語』の注釈書。頭注形式をとり、本文にイロハの記号を付して、その語に関する説明を記述するほか、本文中に傍注を加える。江戸期の『大和物語』の注釈書の中ではかなり古い年代に位置する。『大和物語』は平安前期に成立したといわれる歌物語。主人公の異なる様々な短編 173 段で構成され、主に前半に宮中における物語を、後半に古伝承を配置する。展示箇所は 156 段「姥捨山」。妻に責め立てられ伯母を山に置いて逃げた男が後悔の後、伯母を迎えにいく。作中の和歌「わが心なぐさめかねつさらしやなをばすて山に照る月を見て」は古今集にも入集しており、教科書にも収録されることの多い作品。(出口)



「姥捨(をばすて)」

信濃(しなの)の国に更級(さらしな)といふ所に、男住みけり。

若き時に、親は死にければ、をばなむ親のごとくに、若くより添ひてあるに、

この妻(め)の心憂きこと多くて、この姑(うとめ)の老いかがりてゐたるを、常に憎みつつ、

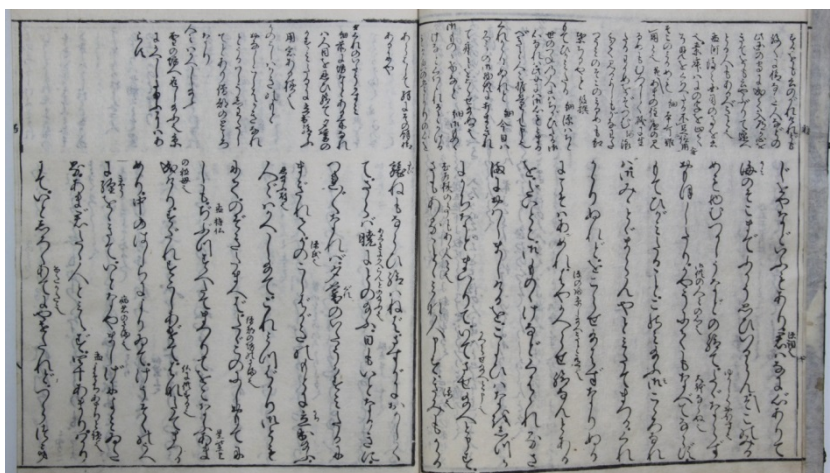
男にもこのをばの御心(みこころ)のさがなく悪(あ)しきことを言ひ聞かせければ、

昔のごとくにもあらず(東京書籍『精選古典B』)

3、源氏物語湖月抄 げんじものがたりこげつしょう

刊、大本、縦 27.2×横 17.2 糎、59 巻 59 冊、北村季吟著、延宝元年(1673)北村季吟跋、
延宝元年成(1673)、林和泉・村上勘兵衛・吉田四郎右衛門・村上勘左衛門板、w913.361/Ki 68/。

江戸前期の国学者北村季吟による『源氏物語』の注釈書。三重大本は本文 54 巻 54 冊、発端 1 冊、
雲隠 1 冊、系図 1 冊、年立 2 巻 2 冊、の構成。『湖月抄』の名は『源氏物語』の作者とされる紫式部が、
石山寺に参籠した際、湖上に映る月を眺めて須磨巻を書いたとする伝説にちなむ。本文の上段に諸注を
挙げ、さらに傍注を施す頭注・傍注併用方式をとる。江戸期に最も読まれた源氏注釈書ともいわれ、『源氏
物語』の普及と研究に大きな影響を与えた。『源氏物語』は平安中期の長編物語。美貌の貴公子光源氏
の恋愛模様を中心に、その生涯を描く。展示箇所は光源氏と、後に紫上と呼ばれる少女との出会いを描く
若紫巻の一部。(出口)



「若紫」

日もいと長きに、つれづれなれば、夕暮れのいたう霞(かす)みたるにまぎれて、
かの小紫垣(こしががき)のもとに立ち出(い)でたまふ。人々は帰したまひて、
惟光(これみつ)の朝臣(あそん)とのぞきたまへば、ただこの西面(にしおもて)にしも、
持仏(ぢぶつ)すゑたてまつりて行ふ尼なりけり。簾(すだれ)少し上げて、花奉るめり。
中の柱に寄りゐて、脇息(けふそく)の上に経を置きて、いとなやまげに読みるたる尼君、
ただ人と見えぬ。四十余(よそぢあまり)ばかりにて、いと白うあてに、やせたれど、
つらつきふくらかに、まみのほど、髪(かみ)のうつくげにそがれたる末も、「なかなか長さよりもこよなう今めかきものか
な。」と、あはれに見たまふ。(大修館書店『古典 A 物語選』)

4、源氏物語評釈・語釈・余釈 げんじものがたりひょうしゃく・ごしゃく ・よしゃく

刊、大本、縦 25.9×横 18.5 糎、14 巻 13 冊、萩原広道著、嘉永 7 年萩原広道序、嘉永 7 年(1854)
～文久 1 年(1861)刊、
(大阪)森本専助・(大阪)松村九兵衛他 8 軒板、913.361/H14。

江戸後期の国学者・歌人である萩原広道による『源氏物語』の注釈書。首巻総論に 2 巻 2 冊、
本文の注釈である桐壺巻から花宴巻に 8 巻 8 冊、付属する語釈 2 巻と余釈 2 巻に 3 冊をあてた、
合計 14 巻 13 冊の構成。本文の注釈では各巻の初めに詳しい総論を記述し、本文の左傍に俗語訳、
左右の段に語釈や解説を記すなど様々な工夫がなされており、全体としては江戸期の『源氏物語』研究の
集成ともいえる内容になっている。展示箇所は物語の始まりである桐壺巻の冒頭部分で、
母親である桐壺更衣が帝の寵愛を受け、帝の子である光源氏をその身に宿すまでの過程を描く。(出口)



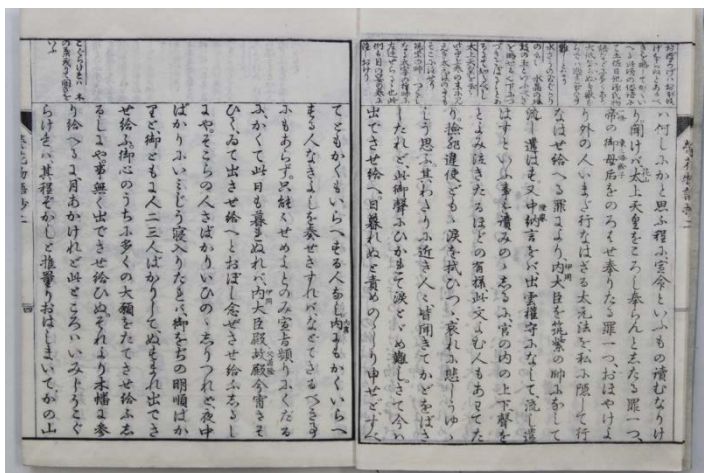
「桐壺」

いづれの御時(おほんとき)にか、女御(にようご)・更衣あまた候(さぶら)ひ給(たま)ひける中に、いとやんごとなききはにはあらぬが、すぐれて時めき給ふありけり。初めより我はと思ひあがり給へる御方々(おほんかたがた)、めざまきものにおとしめねみ給ふ。同じほど、それより下臈(げらふ)の更衣たちは、ましてやすからず。朝夕の宮仕へにつけても、人の心をのみ動かし、恨みを負ふ積もりにやありけむ、いとあつくなりゆき、もの心ぼそげに里がちなるを、いよいよ飽かずあはれるものに思ほして
(明治書院『古典B』)

5、 栄花物語抄 えいがものがたりしょう

刊、半紙本、縦22.6×横15.0 糎、40巻6冊、赤染衛門編、小中村義象・関根正直標註、明治23年(1890)11月 西村茂樹序(若村常猛書)・葬舎のあるし正風(高崎正風)序、明治28年(1895)1月再版(明治24年(1891)9月初印)、(東京)渡邊兵吉板、適園文庫旧蔵、913.392/E37/1~6

別名「世継物語」とも。「栄花物語」という書名は藤原道長の栄華を主に書いたことによる。作者は赤染衛門説が有力である。道長についての記述を中心に、宇多天皇から堀川天皇にいたる約二百年間の貴族社会における歴史を編年体式仮名文で物語風に叙述する。作者の主観にもとづいた文学的潤色がなされている。本書は『栄花物語』に註を入れたもの。語釈(本文上段)や人名の補足(本文内)のほか、末尾に登場人物家系図を備える。展示箇所は藤原道長の甥・伊周が数々の罪で失脚し、その処遇が決定される場面。(樗木宏成)



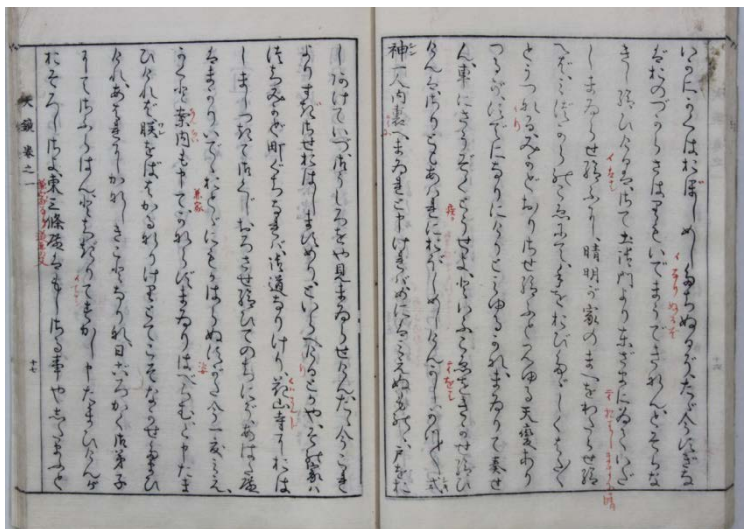
「伊周隆家の配流」

かかるほどに、この乱れがはしき者の中をかきわけ、さすがにうるはしく装束きたる者、南面にただ参りに参りて、こは何にかと思ふほどに、宣命といふものを読むなりけり。聞けば、「太上天皇(だいじょう)天皇(てんのう)を殺し奉らむとしたる罪一つ、帝の御母后を呪はせ奉りたる罪一つ、朝廷よりほかの人いまだ行はざる大元法(だいげんのほう)を、私に隠して行はせ給へる罪により、内大臣を筑紫(つくし)の帥(そち)になして流し遣はす出雲権守(ごんのかみ)になして流し遣はす。また、中納言をば出雲権守になして流して遣はす。」といふことを読みものしるに、宮の内の上下、声をとよみ佐きたるほどのありさま、この文読む人もあわてたり。(東京書籍『古典A』)

6、大鏡 おおかがみ

刊、半紙本、縦 23.1×横 15.6 糎、8 卷 4 冊、久米幹文校訂、明治 23 年(1890)10 月
飯田武郷序、明治 24 年(1911)4 月刊、適園文庫旧蔵、(大阪)吉川半七板、913.393/038/1~4

『今鏡』、『水鏡』、『増鏡』とともに「四鏡」と呼ばれる歴史物語書。成立年代は万寿 2 年(1025)説とそれ以降の説がある。本書の構成は、序、本紀(文徳～後一条天皇までの 14 代)、藤原氏の列伝、鎌足以来の藤原氏繁栄、その他諸々の話からなる。藤原冬嗣から摂関家として栄華を極めた道長にいたるまでを、数多くの天皇・后・大臣・公卿にわたり語り及んだ作品である。これらの歴史は、語り部の大宅世継と夏山繁樹、そしてその妻の若侍による語り合いにより展開する。展示箇所は花山天皇が藤原道兼にそそのかされて出家してしまった場面であるが、高校国語教科書では家の前を通る花山天皇の出家を安倍晴明が阻止しようとするその前の挿話が省かれるのが残念。(樗木)



「花山院の出家」

花山寺におはし来着きて、御髪下ろさせ給ひて後にぞ、粟田殿は、「まかり出でて、大臣にも、変はらぬ姿いま一度見え、かくと案内申して、必ず参り侍らむ。」と申し給ひければ、「我をば謀るなりけり。」とてこそ佐かせ給ひけれ。あはれに悲しきことなりな。(明治書院『精選古典B 古文編』)

7、平家物語　へいけものがたり

刊、大本、縦 26.9×横 19.5 糎、12 巻 12 冊(うち、2・3・12 は欠本)、編著者未詳、天和 2 年(1682) 6 月刊か、三重県立師範学校旧蔵、913.45/H51/1～11(2・3・12 欠)

平家の盛者必衰を描いた軍記物語。成立時期は諸説あり、承久 3 年(1221)以前とする説や、承久年間から建長 4 年(1219～1251)とする説などがある。平家物語の伝本は頼朝の拳兵を東国側から捉える広本系と京都側から捉える略本系がある。盲目の琵琶法師が語ったことでも有名。本書は天和 2 年(1682)頃の系統版本で略本系に当たるとされる。挿絵は屋島の戦いにおいて那須与一が的に見立てられた扇を弓で射る場面(「扇的」)である。挿絵右の文章は「扇的」の次の場面にあたる「弓流し」にすでに入っている。(樗木)



「扇的」

弓は強し、浦響くほど長鳴りて、あやまたず扇の要(かなめ)ぎは一寸ばかりおいて、ひいふつとぞ射切つたる。かぶらは海へ入りければ、扇は空へぞ上がりける。しばしは虚空(こくう)にひらめきけるが、春風に一(ひと)もみ二(ふた)もみもまれて、海へぞさつとぞ散つたりける。(光村図書『国語 2』)

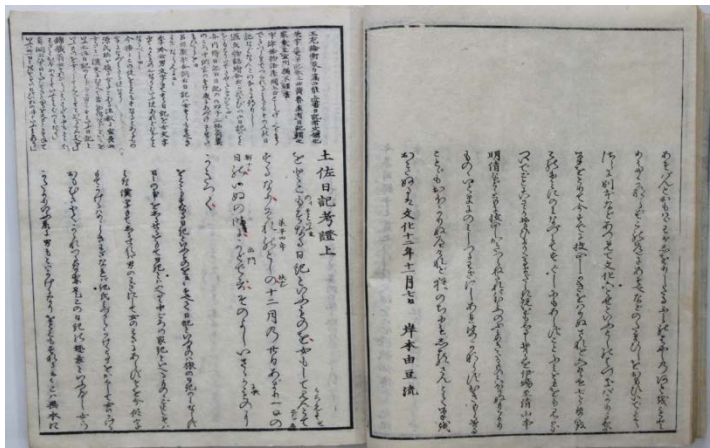
日記

8・9 土佐日記の冒頭の「男もすなる日記」とは男の貴族が公的行事を漢字で記した記録でした。土佐日記は「女もしてみむ」と男の紀貫之が自身を女に仮託し、ひらがなで私的心情を重視して書いたものです。土佐日記以降、蜻蛉日記、更級日記など女性の手による日記文学が隆盛していきます。鎌倉時代に入ると、海道記、東関紀行、10 十六夜日記といった紀行文と日記の融合した紀行日記とよべる作品が多くなります。

8、土佐日記考証　とさにつきこうしょう

刊、大本、縦 26.3×横 18.1 糎、2 巻 2 冊、岸本由豆流著、文政 2 年(1819)林訖序・山本明清序、文政 1 年片岡寛光序、文化 12 年成(1815)、(江戸)須原屋茂兵衛板、915.32/Ki45/1-2。

江戸後期の国学者岸本由豆流(1788～1846)による『土佐日記』の注釈書。本文には異同を付す。本文のあとに解説を記す。頭注欄も諸説詳しい。従来の研究の集大成であり、その後の研究の基盤となった。展示箇所は紀貫之『土佐日記』の冒頭。『土佐日記』は紀貫之が任地の土佐を出て京都に戻るまでの旅日記。承平 5 年(935)頃の成立。当時の男性の日記は漢文が常であり、紀貫之は女性に自らを仮託して仮名文で記した。国語教科書では、展示の冒頭とそれ続く「門出(馬のはなむけ)」、亡児の追想の「忘れ貝」、船旅の苦労を記した「海賊の恐れ」、戻れなかった「阿倍仲麻呂」への思い、終章の「帰京」などが収録される。(吉丸雄哉)



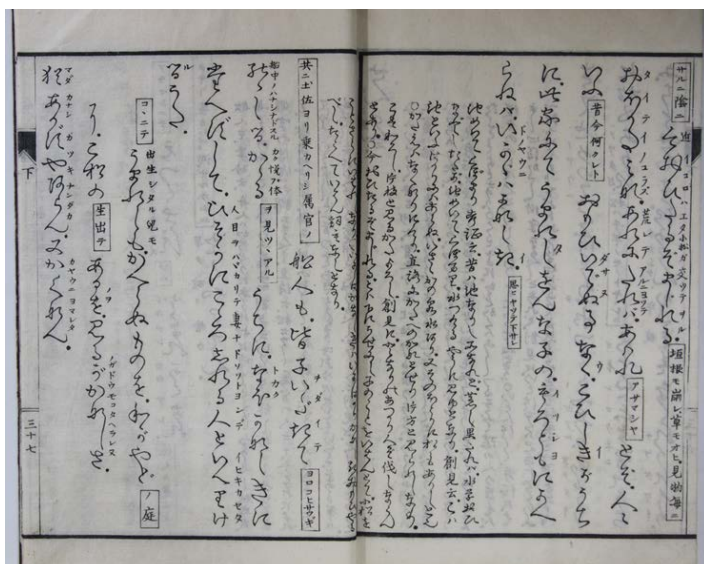
「門出」

男もすなる日記といふものを、女もしてみむとてするなり。その年の十二月(しはす)の二十日(はつか)あま一日(ひとひ)の日の戌(いぬ)の刻(とき)に、門出す。その由(よし)いささかにものに書きつく。(三省堂『精選国語総令』)

9、土佐日記俚言解 とさにつきりげんかい

刊、半紙本、縦 22.8×横 15.4 糎、2 巻 2 冊、佐々木弘綱注解、小中村清矩閱、中村正直題辞、明治 15 年(1882)小中村清矩序、明治 16 年鈴木弘恭序、明治 17 年(1884)刊、文苑堂藤田栄次郎(東京)板、三重県立師範学校旧蔵、915.32/Sa75。

三重県鈴鹿市(石薬師)出身の国学者佐々木弘綱による『土佐日記』の注釈書。弘綱は有名な歌人佐佐木信綱の父。小中村清矩も国学者で東大教授などを歴任した人物。序文によれば「うひまなびのともがら」を対象にしており、内容わかりやすい。展示箇所は終章「帰京」で教科書によく採録される。□囲みは本文にない文字を補ったもの、本文の脇に現代語訳。詳しい解説を二字下げでつけている。京によく戻った喜びあるものの、屋敷は荒廃してボロボロになっており、また亡くなった愛児のことも思い出されて悲しさの場面である。(吉丸)



「帰京」

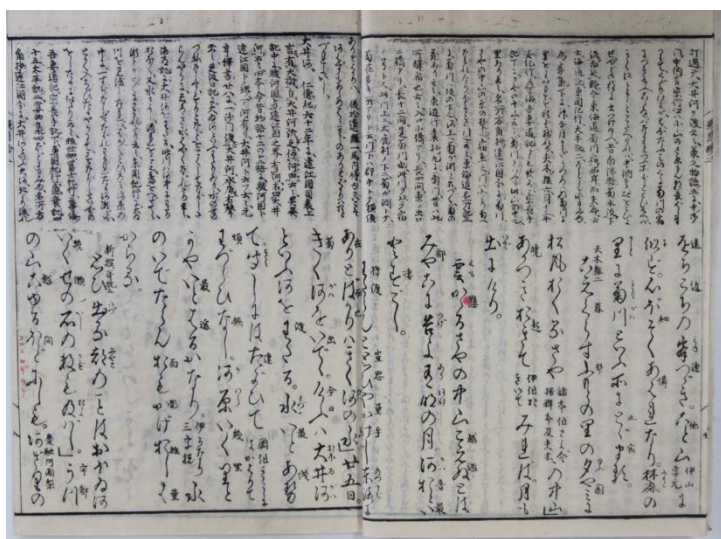
(帰ってきた家は荒れ果てていて、庭は水たまりができ、かつてあった木の半分はなくなり、そのかわり今生(お)ひたるぞ交じれる。おほかたの、みな荒れにたれば、「あはれ。」とぞ、人々言ふ。思ひ出(い)でぬことなく、思ひ恋(い)きがうちに、この家にて生まれし女子(をんなご)の、もろともに帰らねば、いかかは悲(あ)しき。船人(ふねびと)もみな、子(こ)たかりての(の)しる。かかるうちに、なほ悲(あ)しきに堪(た)へずして、ひそかに心(こゝろ)知(し)れる人と

言へりける歌生まれしも帰らぬものをわが宿に小松のあるを見るが悲しさとぞ言へる。
(東京書籍『国語総合 古典編』)

10、十六夜日記残月抄 いざよいにつきざんげつしょう

刊、半紙本、縦25.1×横18.1 糶、3巻3冊、高田(小山田)与清著、北条時鄰補、文政1年(1818)菅原長親序、賀茂季鷹序、文政4年自序、花水庵主春登跋、文政7年(1824)刊、前川六左衛門(江戸)・桑村半蔵(江戸)・松本平助(江戸)・出雲寺文次郎(京)板、適園文庫旧蔵、W915.44/198/1-3。

『十六夜日記』は藤原為家の妻の阿仏尼の著。息子為相と異腹子為氏の相続権争いのため播磨から鎌倉へ弘安2年(1279)に阿仏尼が下ったときの紀行的日記。書名は10月16日出立のため後年そう呼ばれるようになった。本書は校本7種を校合している。高田(小山田)与清は五万冊の大蔵書家としても知られた国学者で多数の著述を残した。展示箇所は「駿河路」。十月二十五日、菊川を出て大井川渡河の場面。頭注詳しい。本文では漢字にふりがなを付し、ひらがなには漢字を付した。紙面右の赤い不審紙や左の書き込みは所蔵者がつけたもの。適園文庫は三重県師範学校教諭阿保友一郎の旧蔵書。(吉丸)。



「駿河路」

二十五日、菊川を出(い)でて、今日は大井川といふ川を渡る。水いとあせて、聞きには違ひて、わづらひなし。川原幾里(いくり)とかや、いと遙(はる)かなり。水の出でたらむ面影、おしはかる。(歌)「思ひ出づる都のことはおほる川いく瀬の石の敷も及ばじ」(大修館書店『古典A 物語選』)

随筆

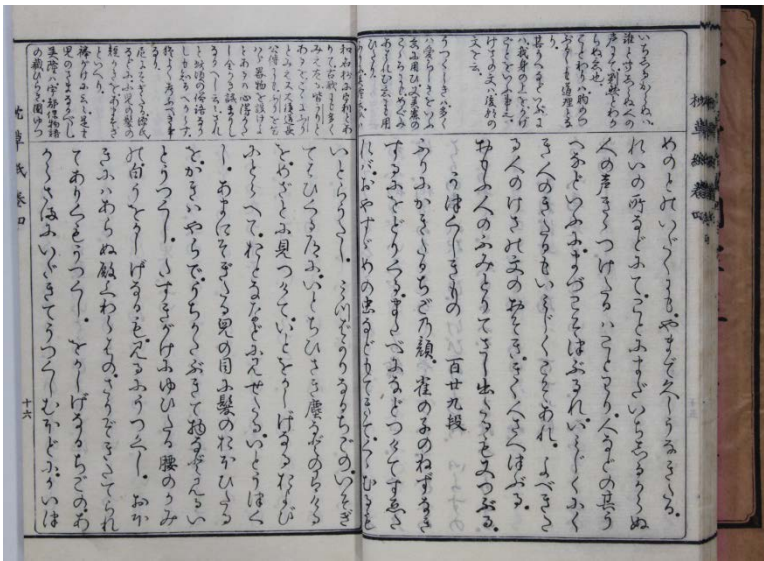
随筆とは自由な形式で自然や人事のさまざまを書きつづった著述のこと。平安時代の11枕草子は鋭敏で繊細な感性で王朝貴族の美意識を記します。鎌倉前期の鴨長明の方丈記、鎌倉後期の12徒然草はともに無常観が根底にあります。徒然草は鋭い観察眼あって、現在でも内容は古びません。

11、標注枕草紙読本 ひょうちゆうまらのそうしどくほん

刊、半紙本、縦 23.0×横 15.2 糎、5 巻 5 冊、佐々木弘綱標注、小中村清矩序、佐々木弘綱跋、明治 24 年(1891)9 月刊、(東京)弦巻七十郎板、適園文庫旧蔵、914.3/Se87。

9 土佐日記俚言解と同じく明治期の国学者佐々木弘綱による『枕草子』の注釈書。本文の上段に解説をおく形式をとる。解説の分量は少なめであるが、明治期の『枕草子』の注釈書としては最初期のものであり、注目すべきである。『枕草子』は清少納言による平安中期の随想作品。後の随筆文学に多大な影響を与えた、随筆文学の祖ともいえる作品。

主に同類のものを列挙した類聚的章段と、自身の生活や心情を描く随想的章段によって構成される。展示箇所は 129 段「うつくしもの」の冒頭部分。作者が「うつくし」(かわいらしい、愛らしい)と感じるものを記した章段で、本人の美意識がうかがえる。(出口)



「うつくしもの」

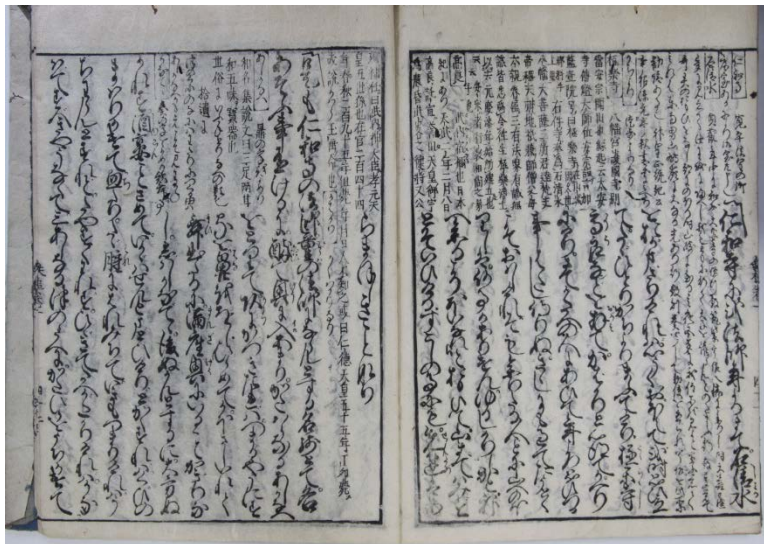
うつくしもの、瓜(うり)にかきたる児(ちご)の顔。雀(すずめ)の子の、ねず鳴きするにをどり来る。二つ三つばかりなる児の、急ぎてはひ来る道に、いと小さき塵(ちり)のありけるを、目ぎとに見つけて、いとをか上げなる指(および)にとらへて、大人ごとに見せたる、いとうつく。頭(か)らは尼そぎなる児の、目に髪のおほへるを、かきはやらで、うちかたぶきてものなど見たるもうつく。(明治書院『精選古典 B 古文編』)

12、鉄槌 てっつい

刊、大本、縦 26.7×横 18.7 糎、4 巻 4 冊、青木宗胡著、西沢太兵衛板、寛文 12 年(1672)刊、914.45/A53。

兼好法師『徒然草』は現代でこそ随筆の代表作だが広く読まれるようになったのは江戸時代に入って注釈書が多く刊行されてから。『鉄槌』は江戸時代の徒然草の代表的注釈書。先行する林羅山の注釈書『野槌』や他書の注に拠る部分が多いが、それまでの巻末注をあらため今は古典注釈書の当たり前となった頭注形式をいち早く導入し、その読みやすさから何度も再版された。慶安 1 年(1648)藤井吉兵衛版が初版で本書は再版本。中学・高校の古典教科書の定番で 89 段「猫また」92 段「ある人弓射ることを習ふに」109 段「高名の木登り」など数多くの段が収録されている。

展示箇所は 52 段「仁和寺にある法師」(吉丸)



「仁和寺にある法師」

仁和寺にある法師、年寄るまで石清水(いはしみづ)を拝まざりければ、心うく覚えて、あるとき思ひたちて、ただ一人、徒歩(かち)よりまうでけり。極楽寺(ごくらくじ)・高良(こうら)などを拝みて、かばかりと心得て帰りにけり。さて、かたへの人にあひて、「年ごろ思ひつること、果たしはべりぬ。聞きにも過ぎて、尊(たふと)くこそおはしけれ。そも、参りたる人ごとに山へ登りは、何事かありけん、ゆかしかりかど、神へ参るこそ本意なれと思ひて、山までは見ず。」とぞ言ひける。少しのことにも、先達(せんだち)はあらまほしきことなり。(光村図書『国語2』)

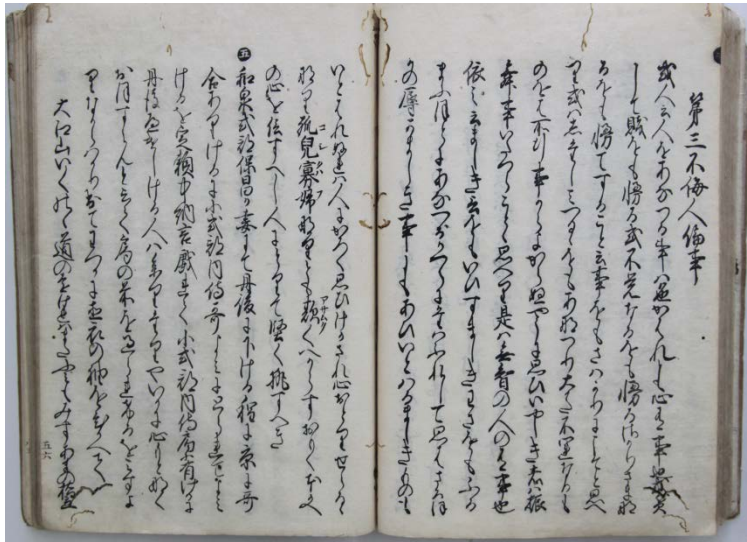
説話

口伝えで伝わってきた話が文章で表現されたもの。物語と似ていますが、神話・伝説・昔話のたぐいを広く集めた短編集であることが違います。教訓的な話を集めた13十訓抄のほか、仏の奇跡や因果応報の理などを記した仏教説話の日本霊異記、今昔物語集、14沙石集が有名です。

13、十訓抄 じつきんしょう

刊、半紙本、縦 22.6×横 16.4 糎、10 巻 3 冊、編著者未詳、元禄 6 年癸酉(1693)9 月刊、(京都)戸嶋勸道軒・(江戸)村上源兵衛・(大坂)磯野平三郎板、三重県立師範学校旧蔵、913.48/J51/1~3

勸善懲悪の仲立ちをするために古今の物語を集め、教訓的な啓蒙意識のもと、処世の道しるべとなるよう編まれた説話集。構成は序文と 10 の編からなる。『大和物語』など和漢の書籍から広く話を求め、『十訓抄』の主題にあわせて要約した。展示品は諸本のうち第四類(流布本)に分類され、近代に入っても底本として使用されてきた。(なお、現在は第一類本と第二類本を底本とする)展示箇所は和泉式部の娘である小式部の内侍が藤原定頼にからかわれたので、とっさに和歌を作り、定頼を打ち負かした話。(樗木)



「大江山」

「丹後へ遣はしける人は参りたりや。いかに心もとなく思(おぼ)すらむ」と言ひて、局(つばね)の前を過ぎられけるを、御簾(みす)の半(なか)らばかり出でて、わずかに直衣(なほし)の袖をひかへて、大江山いくのの道の遠ければまだふみも見ず天の橋立と詠みかけけり。

(三省堂『国語総令 古典編』)

14、沙石集 しゃせきしゅう

刊、大本、縦 26.0×横 17.2 糎、10 巻 3 冊(1~4 巻は欠本)、無住道暁著、弘安 6 年(1283)成立、正保 4 年(1647)11 月刊、(京都)小嶋弥左衛門板、三重県立師範学校旧蔵、184/Mu23/3~5 (1・2 欠)。

「させきしゅう」とも。書名の由来は序文にある「彼ノ金(こがね)ヲ求ムル者ハ抄(さいご)ヲ集メテ是ヲ、玉ヲ翫(もてあそ)ブ類ハ石ヲ拾イテ是レヲ磨ク」から。古今東西の説話を集め、仏教の要旨や処世訓などを説く啓蒙書。著者無住が東国出身でかつ、尾張で過ごしたこともあり、関東・東海などの地方話題が豊富。中世庶民の生活やその中に息づく信仰が描かれている。また、著者が中央で集学した折に知ったと思われる現存の先行書には見られない記事も含まれている。展示箇所は正直者の夫婦が道端に落ちていた銀の袋を持ち主に返して、結果的に得をする話の冒頭。(樗木)



「いみじき成敗」

近年の帰朝の僧の説とて、ある人語りは、唐土(もろこし)に賤(いや)しき夫婦あり。餅を売りにて世を渡りけり。夫、道のほとりにて餅を売りけるに、人の袋を落したりけるを取りて見れば、銀(しろかね)の南挺(なんてい)六つありけり。家に持ちて帰りぬ。(桐原書店『国語総令』)

【適園文庫】



附属図書館で「適園文庫」の蔵書印のある本は阿保友一郎（1848-1939）の旧蔵書です。

阿保は伊勢国菟芸郡中山村（現在の津市栗真町）に生まれ、津市西新町（現南丸之内）で

亡くなりました。適園は号です。藩校有造館で学び、明治5年(1872)に新設された師範学校に進みました。明治8年に三重県師範有造学校の設立にかかわり、明治37年(1904)に引退するまで、主に三重県立師範学校で教諭生活を送りました。国語、漢文が専門で国語学の著作が多いですが、生理学の教授でもあり人体や心理学の教科書も残しています。阿保友一郎は国語国文学を中心とした蔵書403部1430冊を適園文庫として三重県師範学校に寄付し、現在もその一部が三重大学附属図書館に収蔵されています。

◎編集後記◎

本展示の企画・制作は本図書館研究開発室兼務教員の人文学部吉丸雄哉准教授が行いました。解説・解題執筆は吉丸雄哉准教授と人文学部社会科学研究所大学院生樗木宏成・出口真由が行いました。展示品はすべて附属図書館の所蔵品です。

◆参考文献◆

佐々木仁三郎『根本貞路・阿保友一郎・相沢英次郎：近世郷土の教育先賢』三重県良書出版会、1992。

中学教科書は平成 27 年検定版、高校教科書は平成 25 年検定版を用いた。

三省堂『精選国語総合』

東京書籍『精選古典 B』

大修館書店『古典 A 物語選』

明治書院『古典 B』

東京書籍『古典 A』

明治書院『精選古典 B 古文編』

光村図書『国語 2』

東京書籍『国語総合 古典編』

三省堂『国語総合 古典編』

桐原書店『国語総合』